

なまの体験 ネットで共有



立花 隆さん

たちばな・たかし 評論家・ジャーナリスト。1940年、長崎市生まれ。「田中角栄研究」「小林・益川理論の証明」など著書多数。現在、東京大大学院特任教授、立教大大学院特任教授。

私は長崎医大（現長崎大）の付属病院で生まれた。爆心地のすぐ近くの生まれといえる。父は女学校の教師だった。その後父の北京赴任で、私たち一家は原爆を体験しなかったが、父の教え子にも被爆者は多い。その一人の秋月寿賀子さんに今年お会いし、65年前の話を聞いた。

私は、被爆者の診療に当たった医師で、最も早い時期に原爆の記録を残す運動に取り組んだ人だ。父と交友のあった辰一郎さんと同じように、私も立教大で学生と、体験者の話を聞くなど「戦争の記憶」の記録に取り組んでいる。インターネットで発信していくつもりだ。

はいま、喫緊の急務だ。被爆者や戦争体験者は、日々確実に亡くなっていく。いま記録しておかないと、彼らのなまの記憶や体験は消えてしまう。そうした焦燥感があるのは日本に限ったことではない。世界の戦争体験者の中で共通のものだ。ユダヤ人が虐殺されたアウシュビッツ（ポーランド）の強

制收容所やドイツを今年訪ねたが、收容所に関する展示や、新しい証言者が登場するテレビ番組などから、そのことを強く感じた。

広島、長崎、そしてナチスによるホロコーストは、20世紀に起きた最も悲劇的な戦争の記憶だ。この三つを世界の共通体験にしなければならぬ。そのためにも、被爆者の体験の記録を急ぐ必要がある。まだまだ掘り起こしが必要だ。

体験の発信にはインターネットが最適だろう。ネット空間では、様々な展示や映像体験などを一体化した仮想の博物館を作ることまでできる。私自身は、東大の情報工学の先生の協力を得て、バーチャルリアリティー（仮想現実）技術を駆使した展開を目指している。

体験の記録・発信という意味から、今回の朝日新聞の取り組みは大きな役割を果たすだろう。1600人という数がすごい。数は力だ。「腸を出したまま歩いている人」といった印象に残る情景を書いている人がたくさんいる。同じようなことを書いても、それぞれ違う言語表現になっている。練って書いたもの、思いの丈をぶつけたもの、長短も様々だが、いろんな記録があっている。

そして英語化。ぜひ実現してもらいたい。世界に届けるには大切なことだ。協力を呼びかければ、海外からもボランティアで手伝おうという人が出てくるのではないかな。

手記を残すだけでなく、印象深い人に改めてインタビューすることも続けてはどうだろう。聞き手がより深い体験を引き出すということがありうるからだ。いずれにせよ、残された時間は多くない。

（聞き手・城石俊弘）